

## ハンセン病に対する紫外線と気候の影響について

細川 篤 野中 薫雄

琉球大学 医学部 附属病院 皮膚科

目的：ハンセン病の流行地域の大部分は赤道を中心にほぼ南北20度の緯度の範囲内にあり，病態に紫外線と気温や湿度の影響が推測される。琉球大学医学部附属病院を受診した患者の記録から，それらの相関の有無に関して臨床的検討を行う。対象と方法：昭和57年1月～平成16年6月に琉大病院を受診しハンセン病と診断・登録されている新患145人と再燃例7人について調べた。診療記録から患者毎の病変部位を集計し，ハンセン病発症や病変の増悪と紫外線や温度(皮膚温)との相関を検討した。結果：147症例中，顔面に病変が見られた症例は26人(17.7%)，顔面～頸部が初発部位であったり，同部位にのみに病変がみられた症例は各々32人(21.6%)，16人(10.8%)であった。さらにサームラフィーで皮膚表面温度が低い肘部と膝蓋部にも病変が比較的が多かった。また，問診から発症時期が明らかであった63例の月別頻度では，紫外線量の多い6月にピークがみられた。まとめ：同様の比較出来る資料がなく，病原菌(*Mycobacterium leprae*)の2分裂時間が10～20日間と長く実験用ヌードマウスでは病変はfoot padのみであることから動物実験が困難であり，この相関を確証出来なかった。しかし臨床的に右顔面に長時間紫外線を受ける自動車運転手ら数例の臨床症状や，皮膚温の比較的高い被髪頭部，腋窩，会陰部～肛門に病変や知覚障害をもつ症例がない点などからは，これらの相関があるのではないかと考えられた。

---

The influence of UV and temperature to leprosy lesions.

ATSUSHI HOSOKAWA

Dept Dermatol Medicine , Univ of the Ryukyus , Okinawa, Japan